

七月三一日

とうとう旅立ちの日になった。落ち着かない。バイクの点検も完璧にやっておかねばならないのだろうが、まともにやったことと言えばバッテリー液の補充くらいなものだった。エア圧の調整すらやってない。何しろ暑くて、少しでも何かをやるとすぐに疲れてしまう。

そして荷物の最終確認。揃っているはずだが、忘れているものがあるような気がしてならない。

ツーリングバッグとダッフルバッグをバイクへつける。一気にロング・ツアラーという雰囲気になる。

憲ちゃんが来て少し話をする

昼間は晴れていたのだが、夕立が来てもおかしくないような雲が見える。フェリーターミナルに着く前に夕立にでもあったのではたまらない。少し早く出発することにした。

4時頃に出発！

アライのトレーナーの上にアーミーベスト。下はむろんジーンズだ。重い荷物を付けたバイクがどうなるか心配だったが、走り出してみるとそれほどでもない。

海岸通りから国道に出ることにした。走り慣れた道なのだが、これから北海道に行くために走るとなれば話は違う。不安を胸一杯に抱えながら走っていた。

本当にこれから北海道に行くのか？無事に到着できるのか？・・・何か夢を見ているような現実離れた気分だ。

空は相変わらず曇り。雨の心配は未だ無さそうだが、東京のほうではどうだかわからない。

首都高のランプはすぐに判った。料金を払って走り出す。地下道のようなところでランプが俺を追い越して行く。慌てることは無い。今日はロング・ツーリストなのだ。それでも夢中に走っているうちに東京に入ってしまう。途中で渋滞に遭う。センターラインを走ってすりぬけると、事故でもあったらしい。それを抜けると再びスムーズに流れ出した。

とうとう平和島ICへ。ぐるつと大きなカーブを描く坂を下りて、3車線の道をまっすぐ行くと湾岸道路に出た。「環7大井埠頭」という文字板も予定通りだ。何もかもが初めての道。もうツーリングは始まっているのだ、という思いが強くなる。

東京港トンネルを抜けるとファエリーターミナルへの案内板があった。そのまま直進。

この先に大フェリーの到着する港があるなんて信じられないくらい閑散とした風景だ。トラックとコンテナがときおり見える他には何も無い。典型的な埋立地の風景だ。

しかし、確かにフェリーターミナルはあった。

とうとうフェリーターミナルまで来てしまった。北海道への第一歩は踏み出された。もう後戻りはできない。と言うよりはここまで来て、漸く北海道に行くのだ、という実感が湧いてきたとも言えるだろうか。

フェリーターミナルへの到着は5時半頃だった。出航まで6時間あるから、まだ船は着いていない。一番左の区画に搭載を待っているらしいバイクが2台止めてあった。その他にはまだクルマの姿は無い。一般用駐車場の所に数台の四輪とCB50があった。俺はそのCB50の脇に自分のバイクを止めた。

井出氏との待ち合わせも1時間以上先の話だ。フェリーターミナルビルの前の電話ボックスから、家に電話をして無事に港に着いたと伝えた。

バイクの数が段々多くなってくる。みんなツーリストだ。一番左のスペースに次々とバイクを止める。

待ち合わせ時刻を過ぎても井出氏が現れないので、一人でターミナルビルに入る。少し降った雨も止んだ。レストランがあるがメニューの少ないのに驚く。仕方なしにカレーを一人で食った。そうこうしているうちに、フェリーが到着したらしい。レストラン脇の出口から降りて来る。

ターミナルビルから再び外へ出ると井出氏に会った。ソアラと一緒にだ。それから乗船までの長い時間、様々なライダーとバイクを見ながら井出氏と話をしていた。

さすがは北海道に渡ろうというライダー達だ。暴走族まがいのおかしなライダーは一人もいない。そして個性は違えどみんなライダーの顔をしている、とつくづく思った。ひよっとしたらライダーというのは最も素晴らしい人種じゃないか、と思ったりもした。

もうひとつ驚いたのは自転車で北海道に渡ろうとする奴が意外に多いことだ。前・後輪にバッグをぶら下げたツーリング仕様の自転車をここで初めて見た。

バイクにしろ、自転車にしろ、みんな大きな夢を抱いてこの埠頭に集まっているのだ。そんな中の一人でいられることが嬉しかった。

やがて窓口でチケットを買い乗船する時刻になった。船の後方の入り口から搭載されるらしい。何十台ものバイクがいつせいにその入り口に向けてスタートする。壮観だった。中にはレースと間違えて追い越して行く奴もいる。

係員が一台一台チケットを確認してはバイクのスタートを入り口前で許可する。その度にバイクがフェリー後方の入り口から船の中に呑み込まれていく。

一体、俺は何ていうことをしているんだろう。これがいい歳をした男のすることか。いやそんなことはどうでもいい。バイクが好きで北海道を走りたいから、今このライダーの集団の中にいるのだ。

俺の番になった。まるで教習所で走らせたときのような緊張と昂奮が入り混じった気分で、大地と船を結ぶ鉄の坂道を駆け上がった。入り口を入ったところが大きなフロアで、さらにその下に潜ったところがバイクのフロアだった。ハンドマイクで係員がかん高い声で何度も叫んでいる。

「ギアはローにし、ハンドルはロックして下さい。サイドスタンドを立てて荷物はすべてお持ち下さい。ギアはローにし…」

全ての荷物を持って客室への長くて急で狭い階段を上るのはたいていへんな苦行だった。

ホールで少し待たされた。客室は清掃中らしい。ホールの椅子に座って、ほっと一息ついた。やれやれ！

何もかもが初めての経験だから精神的に疲れる上に、荷物運びで肉体的にも疲れた。しかし夢のような瞬間の連続じゃないか！こいつはたまらない刺激だ。

客室に行った。狭い。しかし窓際にソファがあった。そこでしばらく煙草をすっていると、同室の客らしい男が入って来た。こいつとならしばらくの間うまくやれそうだ。そう思った。安心もした。

バイクの乗船が始まったのが9時頃だ。それから四輪の積み込みがあつて、井出氏と会えたのは十時過ぎだった。それからホールへ行つて二人でビールを飲んだ。今まで我慢していたから、このビールはあまりにも美味かつた。

十一時四十五分、出航の時刻だ。船の振動がひととき高くなる。ホールのすぐ外のデッキに飛び出した。フェリーターミナル埠頭の黒々とした景色と、その向こうにひろがる東京の夜景。夢の世界のようだ。

デッキの上に風が吹き渡る。黒い海に白い波が立つ。足元の振動。そしてゆっくりと船は大地を離れ始めた。

ついに北海道への出発だ！だが、感動というよりも俺は訳もなく興奮していた。頭の中はカラッポになり、少しずつ離れていく景色を見ていた。デッキの上の風が次第に強くなる。

それから暫くはずっと岸の夜景を見ていた。しかし夜景だけではどこを通っているのか分かるはずもない。光が次第に少なくなり、ポツンと途切れたところで東京湾を出たらしいことが分かった。あとは黒々として何も見えない海が広がるばかりだ。